

意識の表象理論

太田紘史

1. 意識の問題——機能主義の欠陥

心的状態のすべてが意識的なのではないのだとすると、一体どのような条件の下で心的状態は意識的になるのだろうか。そして、意識的な状態とは、そもそもどのような状態を指すのだろうか。心の哲学において、意識を表象の観点から積極的に説明しようとする一群の理論が、「意識の表象理論」である。今回、この表象理論の展開に焦点を当てる。まず、意識を説明することが問題となる理由——機能主義による意識の説明の失敗——を見ておこう。

20 世紀の物理主義的な心の哲学の出発点は、Place(1956)や Smart(1959)らが提唱した心脳同一説である。その主張は、心的状態と何らかの物理的状态（例えば脳状態）を同一視するような法則的一般言明が存在するはずだというものだ。例えば、「痛みを持つ ↔ 神経 C が発火する」といった法則的一般言明が、あらゆる心的状態に関して存在するはずだ、とされる。しかしこの心脳同一説は、Putnam(1960, 1967)や Fodor(1974, 1981)により批判される。物理主義は、心的状態と物理的状态のタイプ同一性を主張する物理主義（タイプ同一性）と、心的状態と物理的状态のトークン同一性を主張する物理主義（トークン物理主義）に区別されるが、心脳同一説はこのうち、心的状態と脳状態のタイプ同一性言明を主張するような、タイプ物理主義の一種である⁽¹⁾。そして、Putnam や Fodor らは、トークン物理主義を維持しつつ、タイプ物理主義に代わるものとして機能主義を提案する（Block and Fodor, 1972）。機能主義によれば、心的状態とは機能的状態に他ならないのであって、脳状態のような物理的状态によって一般的に特徴づけられるようなものではない。機能的状態とは、システムに対する入力と出力、そしてシステムの状態の間の関係の観点から特徴付けられる内的状態である。特に Fodor によれば、機能的状態とは、状態間の因果関係の観点から特徴付けられるような内的状態である。例えば、システムに対する身体的刺激（＝入力）からシステムの行動反応（＝出力）を因果的に媒介するような一連の内部状態があり、それらの内部状態の間にも因果関係があるとき、システムが痛みを有している状態（＝心的状態）はそのような内部状態として同定される。人間の心的状態は脳の物理的状态によって実現されていることを認めるとしても、機能主義によれば、火星人やロボット、霊

の実体ですら、機能的状態に関して人間と同じであるならば、人間と同じ心的状態にある。

以上のような物理主義と機能主義に関して、次のように言える。第一に、タイプ物理主義はトークン物理主義を含意するが、後者は前者を含意しない。なぜなら、トークン物理主義は個々の心的状態が何らかの物理的状态によって実現されることだけを主張するのに対して、タイプ物理主義はトークンの間で共通である何らかの物理的状态が心的状態と同一であることを主張するからだ。第二に、トークン物理主義と機能主義は、矛盾しない。なぜなら機能主義は、心的状態は機能的状態であることを主張し、その機能的状態がどのような基盤によって実現されるかについては何も主張しないからだ。それゆえ残された問題は、タイプ物理主義と機能主義のどちらが妥当であるかということである。一般に、心の認知活動の説明に関しては、機能主義がタイプ物理主義よりも有望であると考えられている。なぜなら、認知活動は一連の機能的状態として捉えることができ、しかも機能的状態を実現する物理的状态は異質なものでありうるからだ。実際、機能主義は心の哲学や認知科学において広く浸透している。しかし機能主義は意識の説明においても、同様の力を有しているだろうか。

機能主義が難問を有するとしたら、それは意識を説明することだと考えられている。Block(1995)は、意識を「現象的意識」(phenomenal consciousness)と「アクセス意識」(access consciousness)に区別する。現象的意識とは、経験に伴う感覚や感じのことである。そしてアクセス意識とは、その内容が思考や報告に利用されうるような状態である。現象的意識を伴うがアクセス意識を伴わない例は、冷蔵庫の音を何時間も聞いておきながら、そのことについてまったく考えないような状態である。アクセス意識を伴うが現象的意識を伴わない例は、(想像上の存在ではあるが)徹底的に訓練された盲視患者である(即ち、視覚神経経路の一部を損傷して特定の視野における視覚的経験を失いつつも、その視野における対象の様子を正確に推測することができるような患者である)。意識という語は多義的であり、そのうち特に機能主義に対する障害とされるのは、現象的意識である。これが機能主義に対する障害となりうると考えられるのは、機能的状態において同等である二つの心的状態トークンにおいて、現象的意識が有する固有の特徴——即ち現象的特徴(phenomenal character)もしくは感覚質(sensory quality)と呼ばれるもの——において差異があるかもしれないからだ。この障害は、機能主義の提案者であるFodorも自覚していた。機能主義に従って考えると、例えば、痛みの「感じ」を伴わないような心的状態ですら、それが痛みの「感じ」を伴う心的状態と機能的側面に同じである限り、痛みの状態であると言わなければならない(Block and Fodor, 1972)。機能主義に基づいた理論は、このような現象的特徴の差異を識別することができないのである。このように、現象的特徴の差異を機能的状

態の差異と見なせないのであれば、そのような現象的特徴とは一体何なのだろうか。そして、そのような現象的特徴を持ちうる意識とは一体何なのだろうか。現在、機能主義に代わって（もしくはそれを補完する形で）意識を説明すると期待されているのが、一群の意識の表象理論である。

2. 意識の表象理論

Harman(1990)は、意識の現象的特徴が機能主義によって説明できないという批判に応えて、意識の現象的特徴は意識経験における内在的性質ではないことを主張し、さらに表象の観点から現象的意識を説明しようとする。もしも、現象的特徴が意識経験の内在的性質なのであれば、確かにそのような特徴は、機能主義に基づいた理論によって説明することができない。なぜなら、機能主義理論は心的状態を一連の状態間の関係の観点から特徴付けが、内在的性質とはそのような関係から独立である特徴のことであるからだ。しかしハーマンによれば、このように現象的特徴を意識経験の内在的性質と考えることは間違いである。というのも、一般に経験は何らかの対象を表象するものであり、意識経験の現象的特徴は、その経験における（知覚的な）表象の対象の性質であって、その経験の内在的性質などではないからだ。Tye(1995)も同様に、意識の現象的特徴や経験における感じは、すべて表象された対象の特徴であると主張する。例えば、我々が意識する色について、このような説明が当てはまる。我々が現象的特徴として感じる赤さは、端的に外的対象の表面特性である。リンゴを見るときに赤い特徴が現象的に意識されているとすると、その赤さはリンゴの表面特性（特に反射特性）に他ならないのである。これと同様に、色以外の感覚様相における現象的特徴もまた、表象対象の特徴であると考えるのである。このように、意識の現象的特徴を表象の観点から説明しようとする一群の哲学理論は、「意識の表象理論」(Representational Theory of Consciousness)と呼ばれる。

意識の表象理論を直接的に支持するのが、意識の透明性テーゼ (Transparency Thesis of Consciousness) である。Harman や Tye によれば、ある心的状態が注意を向けたり気づいたりすることができるのは、表象対象の特徴のみであって、意識経験そのものの特徴ではない——いわば意識は透明である⁽²⁾。どれほど注意深く内観しようとも、そこで気づかれるのは対象の特徴だけである。意識経験の内在的特徴といったものは気づかれず、ただ表象対象の特徴だけが気づかれているのである。例えば、赤いものが見えているとき（即ち赤さが現象的に意識されているとき）、端的に表象対象の赤さが気づかれているのであって、意識経験そのものの特徴が気づかれているのではない。それゆえ、現象的に意識されている赤さ（即ち赤の現象的特徴）は表象対象の赤さに他ならない。こうして、表象理論の核

心的主張——意識の現象的特徴は表象対象の特徴であるということ——が直接的に支持されるのである。

表象理論が機能主義理論とは異なる長所を理解するためには、表象の内容を表象の性質から区別しておく必要がある。例えば、赤いリンゴを見るときに生じる表象は、しばしば「このリンゴは赤い」という内容を持つが、この赤さは表象の性質ではなく、表象の内容である。なぜなら、赤いリンゴを見るとき、赤に関する表象（即ち赤いという内容の表象）は生じているが、赤い表象（即ち赤いという性質の表象）というものが生じているのではないだろうからだ。また例えば、表象は推論における因果的役割を持つことがあるが（例えば、「このリンゴは赤い」という内容の表象は、「このリンゴは熟している」という内容の信念の形成に貢献することがある）、このような因果的役割は表象の性質（特に機能的性質）であって表象の内容ではないことは明白である。（リンゴを見るときに生じる表象は、「このリンゴは赤い」という内容を持つだけである。まさか、リンゴを見るときに生じる表象が『このリンゴは熟している』という信念形成に貢献する」という内容をもつ、などと考えるのは奇妙だろう。）

このように考えると、表象理論の核心的特徴は、表象の性質ではなく表象の内容に訴えていることだとわかるだろう。即ち表象理論によれば、表象の性質や媒体がどのようなものであるかということとは、現象的特徴とは原則的に独立なのだ（ただしもちろん、現実世界における表象性質や表象媒体は表象内容を制約するだろう⁽³⁾）。そして、だからこそ表象理論は機能主義理論とは異なる仕方で現象的意識の説明に貢献しうるのである。もしも表象理論が、表象内容ではなく表象の因果的役割のような機能的性質に訴えて現象的特徴を説明しようとするなら、それは機能主義理論へと変質することになるのだ。それゆえ表象理論が現象的意識の説明に独自の貢献をして機能主義理論に代わるためには、あくまでも表象内容に訴えなければならないのである。

このような表象理論は機能主義理論の欠点の一つを克服するものである。機能主義理論が現象的意識を説明するうえで不十分であった理由は、現象的特徴の差異が機能的状態の差異によって決まらないように思われたことである。これに対して表象理論は、意識の現象的特徴を端的に表象対象の特徴であると見なすことで、この困難を克服しようとするのである。

表象理論を提案する Tye(1995)は、現象的特徴が表象内容であるとして、一般にどのような属性を持った表象内容が現象的意識に関連するののかについての積極的な提案を行っている。それによれば、現象的特徴とは、認知的利用のために準備された、抽象的かつ非概念的かつ志向的な表象内容（Poised, Abstract, Non-conceptual and Intentional Content：略して

PANIC) である。Tye の考え方は、要約すると次のようなものである。我々が現象的意識を有するとき、その意識経験の表象内容に関連する信念と欲求の形成が形成される。それゆえ一般に、現象的特徴となる表象内容は、信念と欲求の形成という高次認知処理によって利用可能であるように準備された (Poised) 表象内容であると考えられる。また、まったく現象的特徴の変化がないままに、表象の具体的対象を交換することが可能である。表象においてどの個物が呈示されているかは、どのような現象的特徴が意識されるかによって関係がない。それゆえ一般に、現象的特徴が意識されているとき、抽象的な (Abstract) 特徴が意識されていると考えられる。また、意識された現象的特徴には、それに対応する概念は必要ない。例えば、我々人間が意識的に識別できる色の種類は、我々が有している色の概念に比べて、はるかに多い。それゆえ一般に、現象的特徴となる表象内容は、非概念的 (Non-conceptual) であると考えられる (信念が現象的特徴を持っていないのは、信念が非概念的ではないからである)。そして一般に、表象内容は志向的な内容 (Intentional Content) である。

3. 意識の表象理論の欠陥

意識の表象理論は、機能主義理論を補完するものとして有望ではあるものの、様々な批判にさらされている。特に、Kriegel(2002)は表象理論の根本的欠陥を指摘する。表象理論とは、意識経験の現象的特徴を、その経験に伴う表象の観点から (特にその表象内容の観点から) 説明する理論である。このような表象理論が説明すべき事実は、次の二通りに具体化される。一つは、(i) 心的状態 x が心的状態 y と異なる現象的特徴を有することである。もう一つは、(ii) 心的状態 x が多少なりとも現象的特徴を有するという事実である。すると、表象理論による現象的意識の説明も、(i) と (ii) のそれぞれに沿って、次の二通りに具体化されることになる。

テーゼ (R1) : いかなる心的状態 S_1 と S_2 に関しても、 S_1 と S_2 が異なる現象的特徴 P_1 を有するという事実は、 S_1 と S_2 が表象内容を持つおかげで有する特徴に関する事実である。

テーゼ (R2) : いかなる心的状態 S_1 と S_2 に関しても、 S_1 が現象的特徴を多少なりとも有し、 S_2 が現象的特徴をまったく有さないという事実は、 S_1 と S_2 が表象内容を持つおかげで有する特徴に関する事実である。

表象理論の多くの主張者は大抵、テーゼ（R1）を念頭に置いている。しかし、クリーゲルによれば、たとえテーゼ（R1）を擁護することが可能であるとしても、テーゼ（R2）を擁護することは困難な課題であるという。

一般に表象された内容は、意識されることもあるし、意識されないこともあるはずだ。我々は、日常生活において多種多様な知覚や思考を有しているが、そのすべてが意識されているわけではない。おそらく我々は、意識されていない表象を多数有している。例えば、一般に信念には表象が伴うが、我々が有している信念のすべてが常に現象的特徴を有しているとは考えにくい。しかし、もしもテーゼ（R2）が正しいのならば、表象している心的状態は、その表象の性質や媒体に関わらず、その表象内容が何であるかによってのみ現象的特徴を持つか、現象的特徴を持たないかが決まることになる。すると、表象の仕方や媒体に関わらず、それを表象するときは常に心的状態に現象的特徴を持たせるような対象ないし特徴が、環境中に備わっていることになる。だが、そのような対象や特徴を環境中に措定するのは奇妙と言うほかない。このように、テーゼ（R2）の達成を目指す表象理論は根本的な困難を抱えている。このようにテーゼ（R2）が達成されないのであれば結局、表象理論は現象的意識に関するすべての事実について説明を与えることができず、表象理論の説明範囲は現象的特徴の間の差異に関するもの（即ちテーゼ（R1））へと限定されることになる。こうして Kriegel は、表象理論は根本的欠陥を抱えていると主張する。

さらに Kriegel は、Tye の PANIC 理論に対して批判を加える。表象内容が、準備されていること、抽象的であること、非概念的であることのいずれも、現象的特徴となることに無関係である、と批判するのである。例えば、我々が対応する概念を有していない色を意識することができるという事実から、現象的特徴となる表象内容が一般的に非概念的であることを Tye は結論するが、Kriegel によれば、この事実はせいぜい、現象的特徴となる表象内容が非概念的であってもよいということを帰結するだけであって、非概念的でなければならないということは帰結しない。また例えば、Tye の準備性に関する議論は、カテゴリー錯誤だと批判される。現象的特徴に関する信念や欲求が形成されるときに利用可能となるように準備されているのは、正確に言えば、表象内容ではなく、表象である。それゆえ、準備性は厳密には、表象内容に帰属されるべき特徴ではなく、表象自体に帰属されるべき性質である。しかもその性質は、信念形成に貢献するという機能的性質に他ならない。すると、Tye の PANIC 理論は実は、表象の内容だけに訴える純粋な表象理論ではなく、表象の機能的性質に訴える機能主義理論の性格をあわせ持った混合物なのである。

このように、純粋な表象理論は環境中に奇妙な対象や性質を措定せざるをえなくなると批判され、また、Tye の PANIC 理論は表象理論と機能主義理論との混合物の疑いをかけら

れる。しかし、表象理論を提案する他の論者は、むしろ積極的にそのような混合的な理論を構築している。これまで見たような表象理論と並んで多数の論者が提案する高階表象理論は、そのような混合戦略を実行していると言える。

4. 高階知覚理論

意識の表象理論は、大きく分けて二種類のものがある。一方は、一階表象理論 (First-Order Representational Theory) と呼ばれるものであり、表象に訴えることで意識（特にその現象的特徴）を説明しようとするものであり、先ほどの Harman や Tye の理論はこれに含まれる⁽⁴⁾。他方、高階表象理論 (Higher-Order Representational Theory) は、高階表象という特定の性質を持った表象に訴えることで、意識の状態を説明しようとする。高階表象とは、心的状態に対する表象である。それゆえこの理論は、意識の状態を状態間関係の観点から特徴付けようとする点で、機能主義的な性格を有していると言えよう。このような高階表象理論は、知覚的表象に注目する理論（高階知覚理論）と、思考的表象に注目する理論（高階思考理論）に分けられる。

高階表象理論の一種である高階知覚理論 (Higher-Order Perceptual Theory) は、意識の状態を、心的状態に対する知覚的な表象状態が伴う状態とみなす。Armstrong(1968, 1981)によれば、車を自動操縦しているような状態の運転手は、外部環境中の対象を知覚しているが、ある意味において無意識的である——即ち内観的意識 (introspective consciousness) を欠いている——と言える。Armstrong は、このような内観的意識を興味深い説明対象とし、高階の知覚的表象を説明項とする。知覚において神経系は環境中の対象を「走査」し、この走査に対して脳内の別の過程がさらなる走査を行う。知覚は一種の表象と見なすことができるので、このとき、神経系は知覚的な表象状態に対する知覚的な表象状態にあると言える。そして、このような高階知覚の状態にあるとき、内観的意識の状態にあると提案する。Lycan(1996)は Armstrong のこの考えを受け容れ、アームストロングにおいて内観的意識と呼ばれるものを「意識的気づき」(conscious awareness) と呼び、これを説明対象とする。神経系は「内部モニター」を含み、それは低次の知覚的表象状態に対する知覚的表象を行う。このような高次知覚の状態にあるとき、意識的自覚の状態にあると提案する。この高階知覚によって、意識は多数の知覚的表象を統合して利用することができるという。

また、Churchland(1988)も内観的意識に関して、似たような議論を展開している。内観的意識は一種の知覚的状态であり、外的対象に向けられた知覚と同様の知覚を内部状態に向けた状態であるとする。そして後に彼は、認知神経科学の成果を利用して、より具体的な心理学的能力とその神経基盤に言及しながら、その理論を展開する。Churchland(1995)は、

意識が示すいくつかの顕著な振舞いに類似する振舞いを示す回帰型ニューラルネットワークに注目する。例えば、短期記憶が意識の顕著な振舞いとして提示される。意識は通常、時間的な事象系列のうちで、直前の事象とともに現在の事象を把握するために、何らかの短期記憶を有していると考えられる。そして、回帰型ニューラルネットワークは、まさにそのような短期記憶を実現しうると考えられるのだという。ニューラルネットワークは、ニューロン群の活性化パターンによって情報をコーディングする。そして、回帰型のニューラルネットワークにおいては、出力された情報は自身への再入力となり、次の時点での活性化パターンのうちに潜在的に含まれることになる。そのような潜在的な情報は、複数回の入出力のサイクルを経て減衰する。こうして、回帰型ニューラルネットワークは先行する状態に関する情報を短期的に保持するのである。さらに、そのような回帰型ニューラルネットワークの構造が、実際に特定の脳領域（大脳皮質の全領域と視床の間）に存在することを挙げている。

また、高階知覚理論の興味深い点の一つとして、それが動物の意識を積極的に認めることが挙げられる⁽⁵⁾。Lycan(1996)によれば、高階知覚理論に基づいて考えると、意識の状態と無意識的状态はオンとオフのように二値的に切り替わるものではなく、程度を有するものである。ある生物が内部モニターを有するとき、それによってより多くの低次の知覚的表象状態をよりうまくモニタリングし統合するとき、「より豊かに」意識することができるという。こうして、人間は非常に豊かに意識的であり、一部の動物はその意識の豊かさにおいて人間よりも劣っているものの、意識を持つことが認められる。また、人間個体の意識においても、状況によって豊かさに程度があることが認められる。一方、Churchland(1995) また、回帰型ニューラルネットワークを有する動物は意識を持つことが全面的に認められると考える（ただし、その意識内容に関して人間と動物が同様であるかどうかということは、また別の問題であるとされる）。

5. 高階思考理論

一方、高階表象理論の一種である高階思考理論（Higher-Order Thought Theory）は、意識的状态を、心的状態に対する思考的な表象状態、即ち高階の思考状態が伴っている状態とみなす。高階思考理論の提案者である Rosenthal(1991, 2002)は、ある状態が意識的状态であるとき、人はその状態を意識している（conscious of）と考える。即ち、状態 S が意識的である（a state S is conscious）ということは、状態 S が何かを意識している（a state S is conscious of）ことではなく、ある状態が状態 S を意識している（a state is conscious of a state S）ことである。さらに、そのような意識の仕方は、知覚的な仕方ではなく、思考的な仕方である

とされる。それゆえ、ある状態が意識的状态であるのは、その状態にあるという思考——すなわち高階思考——がその状態にほぼ同時に随伴することによって可能となるのである⁽⁶⁾。

このような高階思考理論によれば、二階思考が随伴しているとき、一階思考（例えば「これはリンゴだ」という考え）は意識的であるが、随伴しているその二階思考（例えば「これはリンゴだと私は考えている」という考え）はそれ自体では意識的ではない。それゆえ、日常的において二階思考が意識的になることはほとんどないのである。例えば、我々は日常生活においてリンゴを前にするとき、大抵、「これはリンゴだ」と意識するだけであって、「これはリンゴだと私は考えている」と意識するわけではない。もちろん、そのような二階思考が意識的になることは可能である。我々は少し反省するだけで、「これはリンゴだと私は考えている」と意識することができる。ただし、このような二階思考自体が意識的なのではなく、このとき三階思考（「これはリンゴだと私は考えている」という考え）が随伴している必要があるのだ。Rosenthal はこのような高階思考理論を通じて、高階思考の対象とならない心的状態の存在を認め、すべての心的状態が意識的であることを否定し、意識的であることが心的状態の内在的性質であることを否定するのである。

Rosenthal は、意識に必要な高階表象が知覚的であるとする高階知覚理論を批判する。我々はしばしば、意識的な表象状態として、感覚質を伴う知覚的な表象状態を典型例とみなすので、高階表象理論の構築において高階知覚を措定しようとする。しかし Rosenthal によれば、このような考え方は間違いである。意識的状态とは、ある心的状態によって表象されているような心的状態である。それゆえ、感覚質が意識されるとき、その感覚質は、表象されている低次の心的状態が有する性質であって、それを表象している高次の心的状態が有する性質ではない。高階知覚理論によれば、感覚質が意識されるとき知覚的な高階表象が伴うとされるが、そのような高階表象が知覚的であるためには、その表象自体が感覚質を性質として有していなければならない。しかし、感覚質が意識されうるとしても、その感覚質は高階表象の対象となっている心的状態の性質であって、高階表象の性質なのではない。高階表象が性質として感覚質を持っているということ——即ち高階表象が知覚的であるということ——は、知覚的表象が関与する意識的状态があるという事実からは導かれないのである。

さらに Rosenthal は、意識に関連する事実を高階思考理論によって説明する利点を提示する。我々は新たな概念を学習することによって、より微細な感覚質の差異に気づくようになる（例えば味や音をより微細に識別できるようになる）が、これは意識できる感覚質の差異の度合いが、高階思考において用いられる概念がどのくらいきめ細かいものであるか

に依存するからだという。また、高階思考理論は、言語報告が意識の状態の指標として使われているという事実と折り合いがよいという。常識的判断において、そしてしばしば実験心理学において、ある心的状態が意識的であるかどうかは、それに関する言語報告が指標となる。そして、高階思考理論における意識の状態の基準は、このような常識的判断や実験心理学における意識の状態の基準——言語報告の可能性——と一致するのである。

Rosenthal は、言語報告がなされる状況を次のように解釈する——人がある心的状態に関する言語報告をするとき、この報告行動はその心的状態に対する思考（それゆえ高階思考）を表明（express）しているのである。例えば、人が「痛い」と言語報告するとき、この報告は「痛いとは私は考えている」という思考（高階思考）を他者に表明しているのである。高階思考理論はこの状況に関して、高階思考の対象となっている痛みの状態が意識的状态であり、「痛いとは私は考えている」という高階思考そのものが意識的なのではないと結論する。そして、日常的に我々はこのような状況において、「この人は痛みを意識している」と判断するのであって、「この人は『私は痛いと考えている』という考えを意識している」とは判断しない。こうして、高階思考理論の判断と常識的判断は一致するのである⁽⁷⁾。

6. 展望

意識の表象理論は多様であり、様々な視点から表象理論に関する議論が展開されている。今回概観したものは、そのごく一部でしかない。そして、ある表象理論による意識の説明は、他の理論によればまったく的外れであるように見える。例えば、Chalmers(2004)は一階表象理論を採用するが、彼は、高階表象理論が説明しうる意識は内観的意識だけであって現象的意識を説明しないと批判する（Chalmers, 1996）。しかし、高階表象理論の提案者は、そのような現象的意識も高階表象が伴うことで可能になると反論するかもしれない（例えば Rosenthal(2002)）。意識を説明する理論を構築もしくは評価する際には、どのような種類の意識を説明しようとしているのかについての考察が重要になるであろうし、互いに独立な意識概念や実際に独立に現れうる意識があるのだとすると、それらがいかに関わるのかについての考察が重要になるだろう。

また、表象理論を構築するにあたっては、経験科学の成果が重要となる。Dennett(1991)は認知科学の成果を援用しながら一種の高階思考理論を提案しており、Rosenthal(1993)は自身の高階思考理論とデネットの理論とのどちらが認知科学実験の結果をうまく説明できるかを考察している。高階知覚理論の提案者である Lycan や Churchland などが提案する、内部モニターや回帰型ニューラルネットワークは、もしあるとすれば、神経科学によって発見され研究されるものである。そのような発見や研究は、高階知覚理論の妥当性にとつ

て核心的なものとなるだろう。このように経験的研究の成果は表象理論にとって重要であるが、表象理論のような哲学的理論が認知科学や神経科学の経験的研究を促進することもあるだろう。心に関する哲学理論と経験的理論が相互発展することがあるとすれば、表象理論はその事例の一つになるかもしれない。

註

(1) ここではタイプ物理主義として、大域的タイプ物理主義と局所的タイプ物理主義の両方を含めることとする。大域的タイプ物理主義は、ある心的状態タイプに関して、それと同一である（もしくはそれを実現する）物理的状态タイプが一つだけ存在することを主張する（例えば、心を有する全存在に渡って、痛みが物理的状态タイプ P で実現されると主張する）。一方、局所的タイプ物理主義は、ある心的状態タイプに関して、それと同一である（もしくはそれを実現する）物理的状态タイプが複数存在することを許す（例えば、ヒトの痛みは物理的状态タイプ P_H で実現されるが、マウスの痛みは物理的状态タイプ P_M で実現される、ということを許す）。大域的タイプ物理主義は初期のタイプ物理主義者（Place, 1956, Smart, 1959）などに見られるものであり、局所的タイプ物理主義は後のタイプ物理主義（Enc, 1983, Churchland, 1984, Kim, 1992 など）に見られるものである。タイプ物理主義を採用するとしても、現実の生物学的多様性を考慮に入れるだけでも、局所的タイプ物理主義を採用するのが妥当であろう。

(2) 「木が見えるとき、経験の内在的特徴としてはいかなる特徴も経験されてはいない。木を見て、注意を視覚経験の内在的特徴に向けるよう試みよ。注意が向けられる特徴は、呈示された木の特徴だけであるとわかるだろう。」（Harman, 1990, 667）

「経験対象以外の、ある経験を他の経験から区別するような、経験の内在的特徴に注意を向けるよう試みよ。この作業は不可能に思える。気づきは常に経験を通過し、外的対象において例化されている青や四角形へと到達する。」（Tye, 1995, 30）

(3) 例えばバクテリアが有する表象様式や表象媒体では、ヒトが表象する内容をすべて捉えることはできないだろう。

(4) 一貫して高階表象理論を批判する Dretske(1993, 1995)も、一階表象理論の主張者に含まれる。

(5) 高階思考理論を提案する Rosenthal も、動物が言語を持たないということは、動物が高階思考を持つことを否定する理由にはならないとして、動物の意識について余地を残す（Rosenthal, 1991）。

(6) 高階思考理論の提案者には他に、Dennett(1991)や Carruthers(1996)などが含まれる。

(7) このような Rosenthal の言語報告に関する考えは、デネット（Dennett, 1991, ch.10）において具体的に示されている。

文献

Armstrong, D.M. (1968). *A Materialist Theory of the Mind*. Routledge & Kegan Paul.

Armstrong, D.M. (1981). *The Nature of Mind*. Cornell University Press.

Enc, B. (1983). 'In defense of identity theory', *Journal of Philosophy*, 80, 279-298.

Block, N.J. (1980). 'Troubles with functionalism', in Block (Eds.), *Readings in the Philosophy of Psychology* (pp.268-305). Harvard University Press.

Block, N.J. (1995). 'On a confusion about a function of consciousness'. *Behavioral and Brain Sciences*, 18, 227-287.

Block, N.J. and Fodor, J.A. (1972). 'What psychological states are not', *Philosophical Review*, 81, 159-181.

Carruthers, P. (1996). *Language, Thought and Consciousness*. Cambridge University Press.

- Chalmers, D.J. (1996). *The Conscious Mind*. Oxford University Press. (2001, 林一訳, 『意識する心』, 白揚社.)
- Chalmers, D.J. (2004). 'The representational character of experience', in Leiter (Eds.), *The Future for Philosophy*. Oxford University Press.
- Churchland, P.M. (1988). *Matter and Consciousness - Revised Edition: A Contemporary Introduction to the Philosophy of Mind*. MIT Press.
- Churchland, P.M. (1995). *The Engine of Reason and Seat of the Soul*. MIT Press. (1997, 信原幸弘・宮島昭二訳, 『認知哲学』, 産業図書.)
- Dennett, D.C. (1991). *Consciousness Explained*. Little, Brown and Company. (1997, 山口泰司訳, 『解明される意識』, 青土社.)
- Dretske, F. (1995). 'Conscious experience.', *Mind*, 102, 263-83.
- Dretske, F. (1995). *Naturalizing the Mind*. MIT Press. (2007, 鈴木貴之訳, 『心を自然化する』, 勁草書房)
- Harman, G. (1990). 'The intrinsic quality of experience', in Tomberlin (Eds.), *Philosophical Perspectives, 4: Action Theory and Philosophy of Mind Philosophical Perspectives* (pp.31-52). Ridgeview Publishing.
- Fodor, J.A. (1974). 'Special sciences: Or the disunity of science as a working hypothesis', *Synthese*, 28, 97-115.
- Fodor, J.A. (1981). *Representations*. MIT Press.
- Kim, J. (1992). 'Multiple realization and the metaphysics of reduction', *Philosophy and Phenomenological Research*, 52, 1-26.
- Kriegel, U. (2002). 'PANIC theory and the prospects for a representational theory of phenomenal consciousness.', *Philosophical Psychology*, 15, 55-64.
- Lycan, W.G. (1996). *Consciousness and Experience*. MIT Press.
- Place, U.T. (1956). 'Is consciousness a brain process?', *British Journal of Psychology*, 47, 44-50.
- Rosenthal, D.M. (1991). 'The independence of consciousness and sensory quality', *Philosophical Issues*, 1, 15-36.
- Rosenthal, D.M. (1993). 'Multiple drafts and higher-order thoughts', *Philosophy and Phenomenological Research*, LIII, 911-918.
- Rosenthal, D.M. (2002). 'Explaining consciousness', in Chalmers (Eds.), *Philosophy of Mind: Classical and Contemporary Readings* (pp. 406-421). Oxford University Press.
- Putnam, H. (1960). 'Minds and machines', in Hook (Eds), *Dimensions of Mind* (pp. 148-180). New York University Press.
- Putnam, H. (1967). 'Psychological predicates.' in Capitan and Merrill (Eds.), *Art, Mind and Religion* (pp. 37-48). University of Pittsburgh Press
- Smart, J.J.C. (1959). 'Sensations and brain processes', *Philosophical Review*, 68, 141-156.
- Tye, M. (1995). *Ten Problems of Consciousness*. MIT Press.

〔哲学修士課程〕